



リハビリテーション外来における脳卒中片麻痺患者の長期受療行動の実態とその意義に関する研究

保健福祉学部 作業療法学科

教授 近藤 敏 (こんどう さとし)

連絡先 県立広島大学 三原キャンパス 2511号室
Tel 0848-60-1233 Fax 0848-60-1226
E-mail kondo@pu-hiroshima.ac.jp

専門分野： 作業療法

キーワード： 高齢者, 転倒, 長期通院

●研究内容

病院のリハビリテーション外来には、長期にわたって定期的に作業療法に通い続ける患者が少なからず見受けられます。このなかには、地域で自立して生活可能な壮年患者が少なくないようです。日常生活活動の自立あるいは職業復帰といったリハビリテーション目標を既に達成していると思われる壮年患者が、なぜ時間と費用をかけ作業療法に通い続けるのでしょうか。身体機能回復への固執という理由だけで説明できるのでしょうか。本研究は、維持期の脳卒中片麻痺患者が、どのような意義を感じてリハビリテーション・作業療法外来に通い続けるのか明らかにすることを目的としています。

(本研究における脳卒中片麻痺患者とは)

本研究では、以下の5つの条件を満たす者としてしました。①30歳以上、65歳未満であること、②2年以上にわたり、月1回以上、外来にて作業療法を継続していること、③一人で歩行が可能であること(杖歩行以上、装具装着していてもよい)、④一人で公共交通機関を利用できる程度の能力があること、⑤応答可能なコミュニケーション能力のあること。

(研究の特色・独創性)

これまでの研究は、主としてアンケート調査であり、身体機能の維持・改善、あるいは対人交流にあるといった報告にとどまり、直接、面接調査を行い、片麻痺患者がどのような意義を感じて通い続けるのか、検討した研究はなされていません。

本研究は面接によって、量的、質的に分析し詳細に検討を加え、彼らの潜在的ニーズを探ろうとするものです。

(これまでの研究成果)

本研究のスタートにおける調査では、わが国の作業療法士は、一人平均3.4名の長期通院の片麻痺患者を担当していました。患者の60%が週1回以上通院していました。次に、当事者である片麻痺患者の面接では、機能回復が見られないにもかかわらず、96.4%が作業療法に価値を感じ、89.3%が作業療法に満足していました。

これまでに行った4つの研究を通じて、壮年片麻痺患者は、障害受容ができず、漫然と作業療法に通い続けているわけではなく、「作業療法の身体的効果」や「作業療法に通うことの心理・社会的意義」を日々実感し、また「作業療法に来ないといけないものがある」ために通い続けていることが明らかになっています。

●期待される成果と応用

この研究によって医療者側が気づかなかった長期通院の脳卒中患者のニーズを明らかにできれば、多くのリハビリテーション関係者が悩んでいた長期通院患者に対する方策について示唆を得ることができます。一方で、彼らの長期通院をどこまで認めるべきか、医療機関で彼らの何を優先すべきか、維持期の脳卒中片麻痺者のニーズを損なわず、適正な医療費配分の方策を探るための資料を提示できます。

●想定される連携先 地方自治体, 病院